



「エーヤワディ・デルタ住民参加型マングローブ総合管理プロジェクト」でマングローブ植林の研修に参加する住民たち。マングローブ林の保全が、カキの養殖やアグロフォレストリーを進展させ、住民の生計向上につながることを期待されている

## 実践! ★★★★★ 人間の安全保障

### 政府と市民社会を つなぐ支援を

軍事政権が実権を掌握し、いまだ民主化の見通しが立たないミャンマー。欧米ドナーや国連などの援助が停滞する中、JICAは人々に直接届く支援とともに、政府と市民社会をつなぐ支援を行っている。

#### 三

ミャンマーでは、1988年のクーデター以来軍事政権が実権を握り、2003年に発表された民主化のためのロードマップも先行きは不透明です。また、人口の70%を占めるビルマ族の論理で国を治めようとするあまり、カレン族をはじめとする135の少数民族の尊厳や利害がないがしろにされています。その結果、少数民族と軍事政権との間で武力紛争が続いている地域もあります。

そんなミャンマーで欧米ドナーや国連機関の一部は、同国政府を援助の受け手とすることを禁じているため、援助は草の根レベルの活動を行うNGOに向けられます。それらは、欠乏や政治的な迫害といった脅威に直面している人々を直接の対象とする支援です。

他方、人々の生活を守り、教育や保健医療サービスを提供するためには、行政システムの果たす役割を無視することはできません。そこで、JICAは人々の手に確実に届く支援、人々が自ら問題を解決する能力を育てる支援に、政府と市民社会をつなぐという視点を加えて、「人間の安全保障」の実現を目指しています。

例えば、89年、反政府少数民族のうち最初にミャンマー政府と停戦合意したコーカン族は、限定的な自治を認められると同時に、1000年余りの歴史を持つケシ栽培の停止を政府と約束し、自らの法的統制を強めて03年に麻薬撲滅を達成しました。ところが、社会保障制度が未整備のままケシ栽培をやめたため、農民は現金収入源を失い、貧困が一気に深刻化してしまいました。そこでJICAが05年4月から実施している「コーカン特別区麻薬撲滅・貧困削減プロジェクト」では、食料不足やマラリアの流行で危

機状況にある住民に肥料を配布し、ケシの代替作物の栽培技術を指導したり、薬剤処理した蚊帳の使用を広めるなどの緊急支援を展開しました。でも、これだけでは不十分なので、現在、農業や保健医療、教育などの分野で政府の介入を促しつつ、住民の能力向上とそれを持続的に支える行政組織・制度の構築を目標としています。

また、06年10月から行っている「エーヤワディ・デルタ住民参加型マングローブ総合管理プロジェクト」は、失われつつあるマングローブ林と地域住民の共生を図ることで、貧困緩和と持続的な環境管理を目指しています。活動の主役である住民の意向をくみ取り、住民自らがそれらを実現できるようにすることが、政府に期待される役割です。

残念ながら、現在の行政システムが軍事政権の意向に左右されがちなのは否定できません。とはいえ行政の担い手はあくまで行政官であり、政治と行政に一線を画して臨むのが、JICAと欧米ドナーとの違いです。民主化の進まないミャンマーで、人々が行政機関に物申すのは簡単ではありませんが、両者の触媒として機能できるのがJICAの強みと言えるでしょう。

援助の手續きが極めて複雑で、事業の実施環境は決して良好ではありません。しかし、人間の安全保障の視点に立って働き掛けることで、行政官が地域や住民の声に耳を傾けるようになり、その結果、人々の発意や工夫が施策の中に反映される事例も出てきています。政府と市民社会を行政によってつなぐ支援を通して、人々の安全保障を確かなものにしていきたいと思いません。